

はじめに

はじめまして。シンワワイズホールディングスの倉田陽一郎です。

本書は、アートと経済の交差点で起こる新しい潮流を解説しようとして試みた一冊です。

アートが世界で資産価値としての存在感を増し、デジタルアートが出現する現代において、メタバースやNFTというキーワードも方々で語られています。

私はこれを「資産の分散化」と「個人がアーティストとして活動するための文化土壌の形成」と考えています。

本書では、

・これからのアートがどう発展していくのか

- ・アートと経済が交わる地点で、その価値や値付けはどう変わっていくのか
- ・これから到来するシェアリング・エコノミーにアートがどう影響を受け、経済にどう影響を与えていくのか

といったことを書いてみました。

私は長年、アートの世界に身を置き、アートの価値とそれにまつわるお金の動きを目の当たりにしてきました。元々、学生時代からアートを趣味としており、美術サークルに所属し作品制作もしていました。そして、卒業後は金融の仕事をするかたわら、銀座の画廊や美術館巡りを頻繁に行っていました。当時から銀座の画廊主の皆さんからは、アートに興味を持つ若い外資系金融マン^①として面白がられ、いろいろと面倒を見てもらった記憶があります。

とくに、当時のシンワアートオークションを創業したメンバーの皆さんからは、アート取引の多くについて学びました。そのような中でお世話になっていた5人の画商さんたちから、オークション会社を作るという話を聞いたときには心が躍ったことをよく覚えています。そ

して、1990年に初めてシンワアートオークションを東京の帝国ホテルで開催したとき、有名な日本のアーティストの日本画や洋画が、次々と1億円を超えて取引されていきました。その様を目の当たりにして目を輝かせていたことを鮮明に思い出します。

そして30歳で外資系金融機関を卒業し、自分で投資顧問会社を作り、独立しました。時代はバブル崩壊の1990年代。私は国際金融の専門家ということで、緊急措置として開設された金融再生委員会に呼ばれました。そこで金融担当大臣の秘書官として、政府側の立場から日本の金融再生の仕事に従事することになります。わずか8か月間の国家公務員生活でしたが、日本の金融再生に取り組み、充実感がありました。

その後、自らの投資顧問会社に復帰したときに、シンワアートオークションが当社の顧客となることで、アートの仕事に近接していく機会を得ました。その頃はまだ小さな会社でしたが、それでも日本で一番のオークション会社でした。世界にはクリスティーズやサザビーズという巨大オークションハウスがあるのに、当時、世界第二位の経済大国の日本にはなぜか大きなオークションハウスがありませんでした。いつか必ず日本に大きなオークションハウスが誕生する、そしてシンワアートオークションがその母体のいちばんの近道になるはず

だと考えていました。

そんな日本発の巨大オークションハウス構想を5人の画商に話したとき、「そんな大変な仕事はお前がやれ」と言われたことをきっかけに、2001年にシンワアートオークションの代表取締役社長を引き受けることになりました。

そこから破竹の勢いで、2005年に株式を公開することができました。しかし、日本はバブル崩壊から国の政策としてアンチインフレを提唱し、長いデフレの中で経済が慢性的に収縮していきます。そしてシンワアートオークションが上場を果たした3年後にはリーマンショックが起こります。

日本のデフレは深く進行し、アベノミクスでインフレ政策を標榜しても、日本は構造的なデフレ経済から脱却することはありませんでした。

本書が目指すところ——現代アートが語る未来社会の到来

近代資本主義が行き着く先で、私たちの生活は便利になり、企業は利益を蓄えて豊かになってきました。その反面、大量廃棄やゴミによる環境汚染が進んで、人類の存続まで脅かす

はじめに

はじめまして。シンワワイズホールディングスの倉田陽一郎です。

本書は、アートと経済の交差点で起こる新しい潮流を解説しようとして試みた一冊です。

アートが世界で資産価値としての存在感を増し、デジタルアートが出現する現代において、メタバースやNFTというキーワードも方々で語られています。

私はこれを「資産の分散化」と「個人がアーティストとして活動するための文化土壌の形成」と考えています。

本書では、

・これからのアートがどう発展していくのか

- ・アートと経済が交わる地点で、その価値や値付けはどう変わっていくのか
- ・これから到来するシェアリング・エコノミーにアートがどう影響を受け、経済にどう影響を与えていくのか

といったことを書いてみました。

私は長年、アートの世界に身を置き、アートの価値とそれにまつわるお金の動きを目の当たりにしてきました。元々、学生時代からアートを趣味としており、美術サークルに所属し作品制作もしていました。そして、卒業後は金融の仕事をするかたわら、銀座の画廊や美術館巡りを頻繁に行っていました。当時から銀座の画廊主の皆さんからは、アートに興味を持つ若い外資系金融マン^①として面白がられ、いろいろと面倒を見てもらった記憶があります。

とくに、当時のシンワアートオークションを創業したメンバーの皆さんからは、アート取引の多くについて学びました。そのような中でお世話になっていた5人の画商さんたちから、オークション会社を作るという話を聞いたときには心が躍ったことをよく覚えています。そ